

有畜複合経営で地域農業を切り拓く

梅雨入りしたばかりだというのに、梅雨明け間近の集中豪雨のような激しい雨が降り続く6月の半ば、秋田県雄勝郡羽後町に足を運んだ。羽後町は秋田県の南部、山形県に近く、秋田新幹線こまちが停車する大曲駅から車で1時間弱のところにある典型的な中山間地域、水田地帯であり、西馬音内(にしもない)盆踊りで知られてもいる。

この羽後町の農業者で、尊敬してやまない高橋良蔵さんが昨年7月に88歳で亡くなった。すぐにもお線香上げに駆けつけるべきところ、なかなか時間がとれずに延び延びとなっていたもので、小1年を経過してやっと仏前に手を合わせることができた。

良蔵さんとは10年ほど前、はじめて東京でおめにかかり、その後、2回ほど秋田を訪問した折にお会いしてお話したのみである。表面的にはさほど深いお付き合いをいただいたとは言い難いのであるが、折につけお手紙を頂戴し、また冊子や資料をまとめた都度お送りいただいた。手紙は新聞の折り込み広告の裏を使って書かれたものがほとんどで、良蔵さんの人柄をしのぼせる外連味の無い、かつ温もりを感じさせる万年筆で書かれた字体が印象的であった。そして手紙の終わりに必ず押された色鮮やかな朱印の残像がいまだに目に焼き付いている。また私が新著をお送りするたび、手紙といっしょに新聞広告に包んだ“お祝い”が同封されているのが常であった。失礼ながら良蔵さんは私にとって、もっとも尊敬する農業者の一人であるとともに、私のよき理解者の一人でもあった。

その良蔵さんは小作農家の6人兄弟の長男として生まれ、戦後は水田単作から脱却

するため「複合営農としての水田酪農」に取り組んできた。またその後は飼料用米の生産実践を積み重ね、2001年から飼料用米が転作奨励金対象とされるにあたって貴重なデータ等を提供してきた。こうした農業者としての取組に加えて出稼ぎ農民の労働条件改善のための運動展開、「奥羽山脈に風穴をあける集会」の開催、食とみどりと水を守る秋田県労農市民会議議長、さらには戦争体験の収集、義民伝の発行、長寿者を訪ね歩いての身土不二の実証等々、その活動は多岐にわたるとともに、エネルギーがかつ深い。生産と暮らしを一体化してとらえ、必要なことは同時並行して実践していくまさに百姓であるとともに、地域にしっかりと根を下ろした真の文化人であった。

このように良蔵さんの農業者としての基本にあったものは、水田稲作と畜産の複合化であり、水田の維持・有効活用であるが、稲作経営の安定化と米の生産過剰対策として独自に戦後の早い時期から一貫して取組みを続けてきた。これを可能にしたのは第一に地域に対する徹底したこだわり、第二に行動の裏にあるしっかりとした自らの理論、第三に旺盛かつ幅広い問題意識と好奇心の存在であり情報発信能力であったように思う。

今、米生産調整の廃止を迫られる中、良蔵さんが歩んできた“ひとすじの道”は、われわれに多くの知恵と示唆、そして勇気を与えてくれるものであることを確信する。

(農的社会デザイン研究所 代表

蔦谷 栄一)